【Chapter 3論点】

この章では、第三世界における万人のための教育を、歴史的変遷やタンザニアやケニアといった東アフリカの二カ国を例にその教育と経済の関連等についてみていった。

P.72 l.33

“The Tanzanian and Kenyan examples highlight many of the dilemmas and the challenges surrounding the international call for universal primary education.”

（タンザニアとケニアの例は、普遍的な初等教育への国際的要望を取り巻くジレンマや課題の多くを強調した）

⇒ここで筆者のいうジレンマの内の一つは…

**タンザニアやケニアではそれぞれ初等教育無償化（＝自立）の達成を目指したが、海外の資金援助に大幅に依存していた。**

つまり、初等教育無償化という自立⇔外部支援への依存ではないかと班では捉えた。

タンザニアとケニアの初等教育無償化への動きは大きく二段階あると考える。

第一段階

①1970年代、アフリカにおいて“現地”の概念が生まれる。

→帝国主義の下で、アフリカ本来の伝統的規範、社会的価値観、精神構造を重要視

②ユリアス・ニエレレによる“Education for Self-Reliance”が出版される。

→初等教育無償化や、成人のためのリテラシープログラム促進し、タンザニアの教育的自立を目指す

**⇒第一段階では、帝国主義や植民地主義によって宗主国からあらゆる分野で概念的に影響を受けていた状況から脱する手段として、初等教育無償化を進めた。**

第二段階

①しかし、1980年以降、アフリカへのグローバル経済の大きな波・政府の汚職・貿易制限の影響

　→教育へ経費が回らず、教育費を再導入する（第一段階の無償化が失敗する）

②1990年代、グローバル化に懐疑的な意見が登場

③先進国を中心に“第三の道”の概念が生まれ、教育があらゆる分野（政治・経済・福祉的分野等）の要求を満たす手段であるとみなされる。

④②・③のような背景から、1995年ユネスコや世界銀行等によって“万人のための教育”（ＥＦＡ）が検討され、2000年に本格化する。

→タンザニア・ケニアもこれを受けて初等教育無償化（ＦＰＥ）をそれぞれ再導入する

　**⇒第一段階で目指した帝国主義的な影響から自立を達成するという意図に加えて、第二段階の初等教育無償化は貧困と不平等を減らし、持続した経済成長や健全な政府を目指すという意図を持っていた。**

このように大きく二段階にわたって、タンザニアやケニアでは初等教育無償化を図り、教育的自立等を目指して来た。

**⇔しかし、それには海外からの資金調達に大きく依存しているという実態があった。**

→これが筆者のいうジレンマの一つではないかと考えられる。

⇒これに対して班は…

タンザニアやケニアでは元々経済的に余裕が無く政治的基盤が不安定であるといった背景があり、

上記のような意図から目指された初等教育無償化が外部からの資金調達に依存することは仕方のないことだと言える。つまり、第三世界における教育的自立と、それに伴う海外からの資金への依存は相反するものではないのではないのだろうか？

という疑問を抱いた。

論点

タンザニアやケニアの例で見た、第三世界における初等教育無償化（＝教育的自立）を目指す一方、

外部からの資金支援に大きく依存している、という二項は本当に相反するもの（ジレンマ）なのか。